

少子化時代における建設生産システムの再構築



高野 伸栄
論説委員
北海道大学
公共政策学連携研究部 准教授

東日本大震災の復興工事に関連し、東北地方の建設技術者、技能者の不足が各方面で叫ばれている。資材や人件費の高騰により入札不調が頻発し、元請会社は仕事を請け負ってくれる専門工事業者、技能者を確保することが困難になっている。しかし、これは東北地方に限定した一時的なものではなく、全国的な課題で、将来においては一層深刻になると考えられる。建設業に関連する全国の人々が、将来の技能工不足に大きな不安を抱いている。

この問題は公共工事量の増加局面における一時的なものではなく、建設技能者が置かれた構造的要因に起因すると考えなくてはならない。月給として定められた額ではなく、働きに応じてもらう不安定な給与体系の割に他と比べて高いとはいえない給与水準、不安定な休日、危険を伴い現場毎に異なる作業条件等のいわゆる 3K に加え、事業主規模の小規模化に伴い以前にも増して訓練教育体制は十分とはいえない状況となっている。また、建設工事の成績にも大きな影響を与え、極めて重要な役割を担っている熟練技能者であるにもかかわらず、単なる土木作業員、建設作業員と見なされる世間の無理解もある。また、農業、漁業のように田畑や船などの生産設備が建設技能者には不要で、親の跡を継ぐインセンティブもない。なにより、少子化時代、大切に育てられた多くの若者にとっては、建設現場での居住や現場での労働に心地よい価値を見いだすのは難しい。

これらの状況に対し、(一社)日本建設業団体連合会は 2009 年 4 月に「建設技能者の人材確保・育成に関する提言」を行った。内容は 1. 建設技能者の賃金改善につながる環境の整備、2. 建設業退職金共済制度の拡充、3. 重層下請構造改善、4. 教育への支援、5. 作業所労働時間の改善、6. 作業所労働環境の改善、7. 広報活動の展開というものである。また、国土交通省は 2012 年 9 月に「担い手確保・育成検討会」を設置し、1. 専門工事業者等評価、2. 技能労働者技能の「見える化」、3. 登録基幹技能者の更なる普及、4. 技能労働者に対する教育訓練、5. 戦略的広報について検討することとしている。

そもそも、建設現場では、工事の監理監督を行う技術者と、実際にものを動かし、手を加える技能者の役割分担が明確に二分化されている。いくら建設に関わる技術が研ぎ澄まされようとも、それを具現化していく技能者がいなければ、現場は動かず、生産活動を行うことはで

きない。将来にわたって建設生産システムを維持継承していくためには技能者の確保が必然となることはいうまでもないことである。しかし、少子化時代の将来、今まで以上に安定した環境で働くことを尊ぶ人が多くなると考えられる状況下、この実現は本当に容易ならざることである。

トラック業界では、若い人材を確保するためにも、トラックがフェリーに乗り込み、直接荷物を運搬する方式から、ヘッドとトレーラを分離し、トレーラのみフェリーに載せる方式に業務形態を変更したという。このことによって、数日間家に戻って来られなかった勤務形態から、朝家を出たら夕方家に帰って来られることになり、若年人材確保に寄与しているといわれる。

将来にわたって建設生産システムの維持継承を行っていくためには、日本建設業団体連合会や国土交通省が検討を行っている事項を実現するための方策を着実に実施していくと同時に、トラック業界がなしたと同様の建設生産システムの再構築を行う必要があるのではなかろうか。そのためには、建設生産システムにおける常識というものを今一度、再検討する必要がある。

技術者は社員として月給をもらい、技能者は能力給という常識。技術者は監理監督、手を動かすのは技能者という常識。現場打ちより工場製品は価格が高いという常識等。これらの事柄は土木工事が自然という不確定要素を相手に需要変動が大きい条件の下、単品受注を行わねばならない制約下において、生み出されたものであるから、容易に変更できるものではないことを理解しつつも、生産システムの維持継承のため、社会構造の変化に対応するよう再構築を図らなければならない。たとえば、今以上に現場打ちから工場製品を用いた施工が中心となれば、熟練工は必要のある作業に特化することができ、現場における技能工の数を減らすことができるであろう。しかし、それを実現するには公共事業の積算システムの前足を大きく変えなければならない。「より安く・いいもの」という条件に加え、将来の生産システムの維持継承を踏まえ、当面、安さには反することになる「より社会にとって受け入れやすいこと」という条件追加について、世論の理解を得る必要がある。

これらの建設技能者、建設現場を含めた建設生産システムの再構築においては、いうまでもなく、土木技術者が大きな役割を果たさなければならない。廣井勇博士は小樽築港工事中、コンクリートを自ら練り、深い愛情を現場に注いだという。土木技術者は土木技術を磨くと同時に、建設現場と現場で働く技能者に対し、今以上に篤い目を向け、その改善に向けた努力を行っていくべきではないか。